



昭和女子大学
現代ビジネス研究所
Institute of Current Business Studies

News Letter

昭和女子大学 現代ビジネス研究所 | ----- | ニュースレター |

13

Column

男性の育児休業促進のためには

昭和女子大学現代ビジネス研究所
所長 八代 尚宏

国家公務員について、2020年度から男性の育児休業の1か月以上の取得を促す制度が決められた。この取得のため、あらかじめ業務の分担を見直す管理職の取り組みを人事評価に反映するという。これは育児休業の取得率が女性の8割に対して男性は5%に過ぎず、その期間も2週間以内が7割という現状の改善を、まず公務員から始めようとするものだ。

育児の取得を男女平等にという目標自体は正しいが、肝心の男性の育児取得がなぜ進まないかという要因を、単に上司の偏見と決めつけ、人事評価等で圧力を加えればよいというのは、あまりにも短絡的な発想である。

現行の育児休業法は、男女平等に作られているが、実質的には出産後、完全に仕事から離れる女性を暗黙の前提としている。しかし、30歳以上の男性の場合には、本人でなければできない固有の業務もあり、顧客の不便さや同僚への負担を考慮すれば、とても完全には休めないという実情もある。このため、育児休業中も一定の範囲内であれば短時間就業をしても不利にならないという選択肢があれば、数か月間の育児も可能となろう。

また、育児制度がいくら充実しても、子どもは2-3年間では育たない。現に半数の女性がせっかくの育児を使わずに第1子の出生と同時に離職している。これは現行の長時間労働の下では、育児明けの子育てと仕事との両立が困難なためである。現状の改善のためには、男性の育児促進には、短時間でも長期にわたって取れるような育児法の規制緩和が必要だ。その上で、業務の効率化を進め、テレワークの活用等での労働時間の短縮が基本となる。

Project

株式会社三恵×昭和女子大学プロジェクト 活動報告

現在、「株式会社三恵×昭和女子大学プロジェクト」では第一弾ファーストブラの販売促進と並行し、第二弾サニタリーショーツの商品開発を進めています。

サニタリーショーツ発案のきっかけは、ファーストブラのPR活動中にお世話になった保健室の先生から「小学生の初潮が早まっている」というお話を伺ったことです。

そこで、協働ブランドである“My little blossom”第二章として、“親子の初めてに寄り添うサニタリーショーツ”というコンセプトのもと、第一弾ファーストブラ開発で体感した小学生・お母様の思いを引き継ぎ、初めての生理に不安を抱える小学生の気持ちに寄り添う商品をお届けしたいと、10人の学生で商品開発に取り組んでいます。

メンバーはビジネスデザイン学科、環境デザイン学科に加え、新たに会計ファイナンス学科の学生も加わり、プロジェクト活動が一層活気づきました。

まず、小学生とそのお母様にインタビューを行い、どのような機能が求められているかを調査しました。私たちの商品開発に欠かせないのはアンケート分析や実験です。これらは各学科の強みと今まで授業で学んできた知識を持ち寄ることによって、他にはない“女子大生ならではの”のこだわりを大切にしています。

時には近隣の小学校へ自分たちの足で伺い活動報告を行ったり、採血キットを使い自分たちの指から血液を採取して素材による汚れ落ち実験を行ったりと、知識と身体をフルに使い、商品開発に動んでいます。

(環境デザイン学科3年 高橋 らら)



▶ 研究セミナー

日時:2020年1月16日(木)18:30~20:00

場所:8号館コスモスホール

講師:現代ビジネス研究所特別研究員、エッセイスト、タレント
小島 慶子氏

「『女子アナ』は女性の成功か」

小島慶子さんはTBSでアナウンサーとして15年働いた後、フリーとなり、今年で10年目となる。現在はオーストラリアと日本を行き来する生活を送っている。セミナーでは小島さんの経験談を通し、ジェンダーに関する考え方をお話くださった。

私が特に印象に残ったことは二点ある。

第一に、私は今まで「女子アナ」という言葉からジェンダーを連想したことは無かった。しかし、「女性の活躍＝職場の華」という間違った評価方法が「女子アナの仕事＝女性性の消費」に繋がったのだと学び、男性の女性に対する固定概念(女性は守られるべき、女性は男性がいて初めて活躍できる等)の強さを感じた。小島さんはそれに反発し、わざと女性らしくない行動を取ったそうだ。求められていることに逆らう苦労も多かったそうだが、最終的にはラジオで活躍され、また現在では女子アナを取り巻く環境も少しずつ変化してきており、まさにご自分が杭となって成長することを実践されたのだと思う。

第二に、ジェンダー問題において「男性」だけがいつも悪いのか、という考え方だ。小島さんはご自身が黒柱となって初めて、家計を支えなくてはならないというプレッシャーを感じたと仰っていた。そのプレッシャーから、自分が過去に父親に言われて嫌だった「誰のお金で生活しているんだ」という言葉を、旦那さんに言ってしまったそう。私はこのエピソードから、家庭内では稼ぎ手が偉いという価値観によって「女性を養わなければならない→女性を支えなくてはならない→男性が女性を引き上げることで女性は活躍できる」という順序で思考がシフトし、女性性の消費に繋がったのではないかと考えた。

今回、自分の周りにもジェンダー差別の原因があることがわかり、今後女性性の消費を衰退させるためにも、周りの人のさらに周り(父親ならばその職場等)についても考えることが必要であると思った。(ビジネスデザイン学科3年 榎村 弥佑)

昭和女子大学 現代ビジネス研究所

「女子アナ」は女性の成功か

華やかなテレビの世界で働く「女子アナ」に憧れる人も多いでしょう。ではなぜ「女子アナ」なるものが誕生したのか、見せかけの女性活躍に振り回される、本当のジェンダー平等を実現するにはどのような視点が必要か、考えます。

講師
エッセイスト、タレント
昭和女子大学現代ビジネス研究所特別研究員
小島 慶子氏

日時 2020年1月16日(木) 18:30-20:00

会場 昭和女子大学 コスモスホール

参加料 無料

お申し込みは当日まで受け付けます。飛び入り参加も歓迎します!

お問い合せ 昭和女子大学現代ビジネス研究所 E-Mail: bulab-office@swu.ac.jp



2019年度 研究員活動状況

研究員・特別研究員は、授業のゲストスピーカーや研究協力等、学内の様々な活動に参加しています。今年度は以下の研究員・特別研究員にご協力いただきました。

石川 航平、遠藤 佳代子、太田 行信、大橋 重子、大本 郁子、古田土 俊男、崔 真淑、齋藤 訓之、治部 れんげ、鈴木 清江、高橋 恵子、竹中 哲也、段谷 憲、床鍋 義博、野村 尚克、前田 益司郎、松村 啓史(五十音順、敬称略)

その他、学生のインターンシップ先のご紹介・受け入れなどにもご協力をいただいています。

▶ 公開講座

日時：2019年11月15日(金) 18:30～20:00

場所：8号館5L44教室

講師：現代ビジネス研究所研究員、

日本政府主催の国際女性会議WAW!アドバイザー、

一般財団法人女性労働協会評議員

治部 れんげ氏

「女性活躍を通じた地方創生～成功事例と共通点」

2019年度昭和女子大学の「100周年に向けた学術研究ブランディング事業」の一環として、現代ビジネス研究所が進める「女性の視点からの地域再生とSDGs」の調査研究にご協力いただいた、治部れんげ研究員による成果報告会を開催した。

国全体では12年連続して人口が自然減しており、15～64歳人口の割合は過去最低となっている。特に地方では、進学や就職で地元を離れた若年女性の「戻ってこない問題」が深刻である。

その背景には地方のジェンダー格差、根強い男尊女卑の文化があり、その対策に力を入れている兵庫県豊岡市、長野県、東京都豊島区の事例を通して、若年女性を引き留める必要性が示された。

講座内では、家庭用洗剤大手ジョンソン株式会社が2018年に公開した家事分担を考える動画が紹介され、多くの人の中に性別役割分担を当然と考える無意識バイアスがあるということを感じさせるものであった。ご参考までに以下にURLを記載するので、気づきのきっかけとしていただけたら幸いです。

https://twitter.com/sojiwa_omoiyari

なお最後に、ご多忙の中調査研究にご協力くださった治部れんげ研究員に、この場を借りて御礼申し上げます。

(現代ビジネス研究所事務局 鈴木 美紀)



▶ 研究員サロン

現代ビジネス研究所では、研究員の研究報告や学生のプロジェクト活動報告、また本学教員による専門分野についてのレクチャーなど、様々なテーマで「研究員サロン」を開催しています。2019年度に開催した「研究員サロン」は以下の通りです。

■2019年9月6日(金)

「スマホ依存社会とビジネスの規範」

講師：現代ビジネス研究所特命教授 樋口 一清

■2019年11月27日(水)

「危機の収束から10周年 世界金融危機を振り返る」

講師：現代ビジネス研究所研究員 太田 行信

■2020年2月8日(土)

「トランプ時代の地政学 『戦争と平和』を考える」

講師：現代ビジネス研究所研究員・外交ジャーナリスト 杉本 宏

※終了後研究員交流会開催

■2020年2月21日(金)

「どうする？職場の女性間ハラスメント
～2年間にわたる調査分析結果の報告から」

講師：現代ビジネス研究所研究員 金森 史枝



助成金採択プロジェクト

現代ビジネス研究所では、研究員の研究活動を支援するために、優れた研究に対して研究経費の一部を助成しています。学生と協働するプロジェクトには本学教員がアドバイザーとして参加し、学生は実務経験豊富な研究員と共に実践的な学びを深めています。詳しい研究内容は、現代ビジネス研究所ホームページで公開している「紀要」をご覧ください。

研究員	研究テーマ	アドバイザー教員
石川 航平	大学生がつくる女性起業家年鑑出版プロジェクト	飛田 史和
大賀 暁	ペット関連新事業の進展状況調査と市場枠組みのデザイン	小森 亜紀子
大木 義徳	日本の外国人向け社会統合政策(Migrant integration policy)の現状と課題	—
大嶋 淳俊	“東京で識る東北” —復興支援を目指して、アンテナショップの観光PR機能の強化に関する研究—	磯野 彰彦
金森 史枝	職場における女性間ハラスメントの特徴(2) —保育士の女性間ハラスメントの実態—	—
木村 誠	「昭和女子大×日本酒蔵元×ミシュランレストラン」2.0	—
熊坂 敏彦	「地場産業」を中核にした「地域創生」についての研究 —「循環型地場産業」の事例研究(3)—	—
高橋 恵子	子どもの自立、職業選択における家庭の果たす役割についての研究	—
段谷 憲 (共同研究)	ローリングストックと非常食レシピに関する実践的な防災教育研究 —備蓄・非常食の考え方の普及とレシピの深化—	不破 眞佐子
鶴沢 真	大学生のキャッシュレス決済の利用実態に関する実証分析 —アプリ決済(メルペイ)やQRコード決済(楽天ペイ, PayPay, LINE Pay等)による決済行動に関するアンケート調査—	天笠 邦一
豊永 眞美	フランスのマンガ出版社 キューン社のケーススタディ	—
西村 美奈子 (共同研究)	マチュア世代の働く女性のセカンドキャリア —諸外国と日本の比較研究—	—
根橋 玲子	燕三条地域の加工技術とグローバル優位性(2年目) —海外の金属加工クラスターとの連携を目指して—	磯野 彰彦
村井 貴	宇宙をテーマにした、VR体験型サイエンス・コミュニケーションの実践	—

(50音順)

現代ビジネス研究所認定 教員主導型プロジェクト

現代ビジネス研究所では、主に外部団体とコラボレーションした教員主導型のプロジェクトについても、2017年度より研究所のプロジェクトとして認定しています。2019年度は以下のプロジェクトが実施されました。

プロジェクト名	協力団体	担当教員
株式会社三恵×昭和女子大学プロジェクト	株式会社三恵	高木 俊雄 石垣 理子 小森 亜紀子
「女子大生が恋する!」井の頭線プロジェクト	京王電鉄株式会社	高木 俊雄 小森 亜紀子
アサヒ飲料×昭和女子大学 健康チャレンジプロジェクト	アサヒ飲料株式会社	高木 俊雄
昭和女子大学×ダイエー デジタルラボプロジェクト	株式会社ダイエー	高木 俊雄 小森 亜紀子
昭和女子大学×香取市 地方活性化プロジェクト	千葉県香取市	高木 俊雄
Business in English	—	前田 純弘 太田 行信(研究員)
UBS銀行プロジェクト	UBS銀行東京支店	浅田 裕子
Hult Prize Project	Hult Prize Japan	八代 尚宏